

幼稚園における保護者の相談ニーズに関する研究

—子育て相談の利用を阻害する要因・促進する要因—

A Research on Consulting Needs for Parents in Kindergarten : Obstructive and Accelerative Factors to use of Child-Care Counseling

中山 智哉*

Tomoya NAKAYAMA

要約：

本研究は、幼稚園における保護者の相談ニーズの実態を明らかにすること、また保護者が幼稚園教諭に子育て相談をする際の阻害要因、促進要因を解明することを目的とした。調査は、福岡県 A 地区の幼稚園を利用している母親 311 名を対象に質問紙法で実施した。結果、保護者の約 6 割程度が子育て相談を利用していること、相談したい内容として「子どもの社会性に関する相談」が最も高いニーズであることが理解された。次に幼稚園教諭への子育て相談に関しては、44%の保護者が相談しにくさを体験しており、その理由として「幼稚園教諭の多忙さ」の認識があることが明らかになった。子育て相談を促進する要因としては【個別に相談できる環境】【幼稚園教諭の余裕、雰囲気】【幼稚園教諭の子ども理解と伝達】【個人懇談、個人面談の機会】【日頃の保護者に対する声かけ】の 5 つの要因に集約された。

キーワード：幼稚園，保護者，子育て相談，相談ニーズ

Kindergarten, Parents, Child-Care Counseling, Consulting Needs

1. 問題と目的

(1) 問題背景

近年の都市化、核家族化、少子化などの社会情勢の変化は、子育て環境にも大きな影響を及ぼしている。地域の子育ち・子育て機能は低下し、その結果育児ストレスを抱える家庭の増加、親子関係不全、児童虐待など様々な問題を生じさせている。

1998 年の幼稚園教育要領改訂で「子育て支援」が位置付けられて以降、幼稚園においても家庭や地域社会の子育てを支援する様々な役割が求められるようになった。その役割の一つに保護者への保育相談支援がある。2018 年 4 月に施行された幼稚園教育要領では、第 3 章「教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」2 節において「幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め、地域における幼児期の教育センターとしての役割を果たすよう努めるものとする」と幼稚園が保護者支援の拠点であることが明記され、同時に相談支援力が幼稚園教諭の専門性の一つであることが示されている。

* 長野県立大学健康発達学部こども学科・准教授

The University of Nagano, Department of Child Development and Education, Associate Professor

ではまず、幼稚園教育現場での相談支援に関する実態はどのような状況であろうか。文部科学省の「平成28年度幼児教育実態調査」の結果によると、幼稚園における「子育て支援活動（預かり保育を除く）」の実施率は、94.9%と高い割合にあるが、「幼稚園教職員による子育て相談」の実施率に絞ると、64.8%（公立園で73.9%、私立園で59.3%）と決して高い割合とはいえない現状がある。次に保護者が求める子育て相談ニーズについてみると、日本保育協会（2000）が、全国の保育所を対象として行った子育て相談に関する調査では、保育士に対して相談された内容として「睡眠・食事等の基本的な生活習慣」「身体の発育・社会性の発達等」「しつけ・教育等の育児方法」の3つの項目が高い割合であった（8割の保育所で相談されていた）。また笠原（1999）は、保育所を利用する保護者を対象とした調査において、親自身の育児ストレスについては配偶者に相談し、子どもの性格や行動については保育士に相談すると、悩みの種類に応じて相談相手を変えることを報告している。このように、以前から「子育て支援」や「保護者支援」に力を入れてきた保育所における相談ニーズに関する調査は多く行われているが、幼稚園を利用する保護者を対象にした相談ニーズに関する調査は現段階ではあまりみられない。

では次に、保育現場で行われる相談支援は、子育てをしている家庭への支援につながっているのだろうか。中山ら（2014）は、保育現場における子育て相談が母親の育児感情に与える影響について調べるため、子どもが保育園、幼稚園を利用する母親を対象に質問紙調査を行った。その結果、保育の場での子育て相談のしやすさが、母親の子育てへの充実感を高めるとともに、子育てへの不安感や負担感を軽減する要因となることが明らかとなった。対象を幼稚園に子どもを通わせる保護者に限ってみると、荒牧（2016）の調査からは、幼稚園教師からのアドバイスが直接親の子育て不安感を軽減する要因とはなりえないが、子どものことに関する悩みや迷いから生じる不安感は軽減させる要因として働くことが明らかにされている。このように子育て中の母親へのソーシャル・サポートとして、保育者による相談支援が育児不安や子どもの育ちに関する不安等の軽減に有効である可能性が示されている。

しかし一方で、保護者が子育て相談を有効に活用できていない実態も指摘される。荒牧ら（2004）が実施した全国の幼稚園の保護者を対象とした「幼稚園における子育て支援」の調査では、保護者が幼稚園の子育て相談の利用する割合が全体の1割程度しかなかったことを報告している。また荒牧ら（2006）が、再度全国の幼稚園の保護者に実施した調査において、子育て相談に関する質問の仕方を変え「幼稚園の先生に相談することがあるか」と尋ねた結果、半数近くの保護者が相談した経験があると回答し、前回の調査（荒牧、2004）より子育て相談を利用している割合が高いことが理解されたものの、それでも半数は相談したことがないことも示されている。しかし望月ら（2013）が実施した全国調査では、幼稚園児を持つ母親の約8割が「保育者からアドバイスがほしい」と考えていること、また約6割が「とにかく話を聞いてもらえればと思う」という意識を持っていることが示されており、この結果を踏まえると何らかの理由で子育て相談を利用できない保護者が一定数いることが推測される。

このように幼稚園教育の場における相談支援に関して、保護者の相談ニーズを明らかにした調査が少ないこと、また幼稚園教諭が子育て相談相手として保護者から選ばれない何らかの要因がある可能性が示された。

(2) 目的

以上の議論を踏まえ本研究では、幼稚園に対する保護者の相談ニーズの実態を明らかにすること、また保護者が幼稚園教諭に子育て相談をする際の阻害要因、促進要因の解明、またそれらの分析を通して、保護者に相談ニーズの理解を図ると同時に、今後の幼稚園教育における相談支援の具体的な対応を探ることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象者および方法

調査は、福岡県 A 地区の子どもを幼稚園に通わせている保護者を対象とした研修会に参加した母親 420 名を対象に質問紙法で実施した。回答を得られたのは 345 名（回収率：82%）であり、そのうち回答に不備のなかった 311 名を分析対象とした。調査時期は、2017 年 11 月であった。

(2) 調査内容

主な調査内容は次の通りである。

- ① 幼稚園教諭（先生）に子育て相談をする頻度（「よくする」～「全くしない」の 4 件法）および相談する場面（送迎時、個人面談、連絡帳、相談室、その他）。
- ② 幼稚園教諭（先生）に相談したい内容（複数回答）。
 - i. 子どもの基本的な生活習慣に関する相談（食事、着脱、睡眠、排せつ）
 - ii. 子どものことば面についての相談（ことばの遅れ、語彙がふえないなど）
 - iii. 子どもの社会性に関する相談（友達との関係、感情コントロール、落ち着きのなさ）
 - iv. 家庭における子どものしつけや教育に関する相談
 - v. 子育てに伴う負担やストレスについての相談
 - vi. 幼稚園における保育内容や教育内容への要望
 - vii. 子どものくせや気になる行動についての相談（チック、指しゃぶり、爪かみなど）
 - viii. その他
- ③ 幼稚園教諭（先生）に相談しにくいと感じたこと（「よくある」～「全くない」の 4 件法）および相談しにくい理由（複数回答）
 - i. 先生に相談してよい内容なのかわからないから
 - ii. 先生が忙しそうなので、話しかけにくいから
 - iii. 相談するような子育てに関する悩みが無いから
 - iv. 自分自身が忙しく、相談する時間がとれないから
 - v. 子どもが園に通っているため不満や要求は言いにくいから
 - vi. 自分より若い先生には相談しにくいから
 - vii. 先生が相談を聞いてくれる雰囲気ではないから
 - viii. その他
- ④ 「幼稚園教諭（先生）に相談する際、どのような状況だと相談しやすいと感じるか」について自由記述を求めた。
- ⑤ フェイスシートにて、年齢、職業、子どもの人数等を尋ねた。

(3) 分析方法

質問項目のうち量的に測れるもの（質問①～③）については、SPSS.ver25 により統計処理を行った。また、自由記述（質問④）についてはテキストマイニングに基づいて分析を行った。テキストマイニングは、文章という定性的なテキスト情報を系統的に、分析手続きのエビデンスを残しながら処理し、「数量化」と「視覚化」を質的研究に取り込んだものである（樋口、2014）。分析には KH Coder を用いた。

(4) 倫理的配慮

調査の実施に関しては、調査の趣旨と、回答は個人を特定できないように統計処理をした上で公表すること、回答の協力は任意であることなどを、文書および口頭で説明し、同意を得られた保護者のみに回答を求めた。調査は無記名で実施し、さらに個人の特定を避けるため回収箱に自由に投入できるように配慮をした。

3. 結果

(1) 対象者の属性

対象となった311名の母親の属性は以下の通りである（表1）。年齢は、30代（67.5%）が最も多く、20代（5.1%）が最も少なかった。職業は専業主婦（60.1%）が最も多い割合で、パートタイム（31.5%）、フルタイム（4.8%）と続いた。子どもの人数は、1人（43.7%）、2人（37.3%）、3人以上（19.0%）であった。

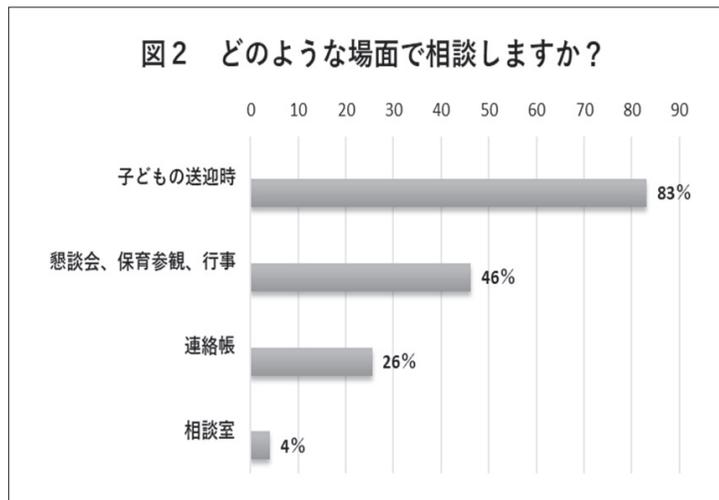
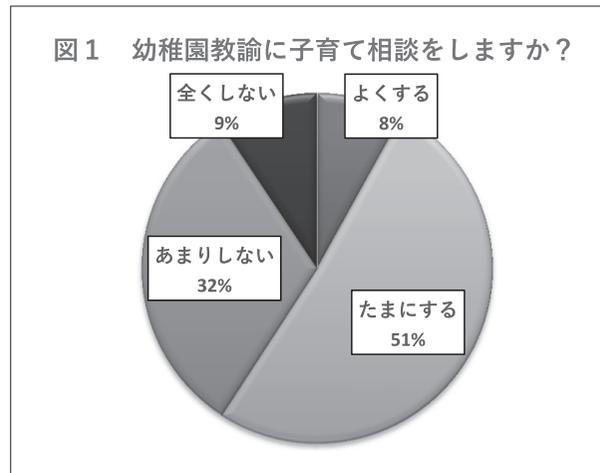
表1 対象の属性（母親：311名）

属性	項目	n	%
年齢	20歳代	16	5.1
	30歳代	210	67.5
	40歳代	85	27.3
職	専業主婦	187	60.1
	パート	98	31.5
	フル	15	4.8
	内職	1	0.3
	その他	10	3.2
子ども数	1人	136	43.7
	2人	116	37.3
	3人以上	59	19

(2) 幼稚園教諭への相談頻度と相談場面

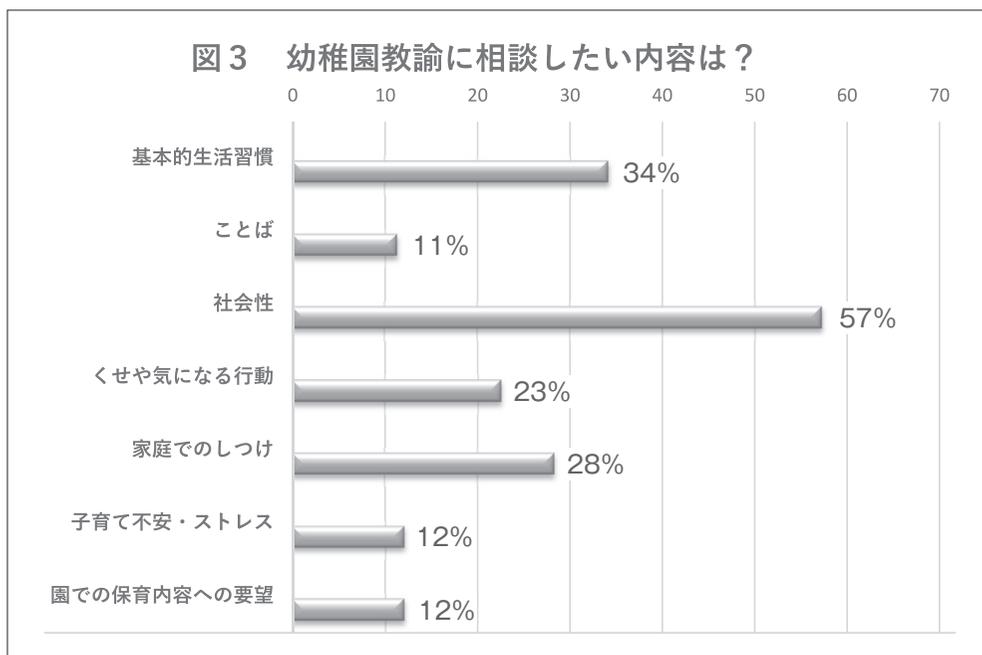
日頃、幼稚園教諭に子どものことや子育てについてどの程度相談するのかを尋ねた。結果、「よく相談する」と回答したのは8%（25名）、「たまに相談する」と回答した者は51%（159名）であり、約6割程度が幼稚園教諭へ子育て相談をしていることがわかった（図1）。

次に、「よく相談する」「たまに相談する」と回答した59%（184名）に対して、どのような場面で相談をするか尋ねた結果、「子どもの送迎時」が83%（153名）と最も高く、「懇談会、保育参観、行事」が46%（85名）、「連絡帳」が26%（47名）、「相談室」が4%（7人）という結果であった（図2）。



(3) 幼稚園教諭に相談したい内容

幼稚園教諭に相談するとしたら、どのような内容を相談したいかについて尋ねた結果、「子どもの社会性に関する相談（友達との関係、感情コントロール、落ち着きのなさ）」が最も多く57%（178名）であった。次に「子どもの基本的生活習慣に関する相談（食事、着脱、睡眠、排せつ）」106名（34%）、「家庭における子どものしつけや教育に関する相談」28%（88名）、「子どものくせや気になる行動についての相談（チック、指しゃぶり、爪かみなど）」23%（70名）と続き、「子育てに伴う負担やストレスについての相談」12%（37名）、「幼稚園の保育内容や教育内容への要望」12%（37名）「子どものことば面についての相談（ことばの遅れ、語彙が増えないなど）」11%（35名）は1割程度という結果であった（図3）。



(4) 幼稚園教諭に相談しにくいと感じたこととその理由

幼稚園教諭に対して、子どもや子育てに関する相談をしにくいと感じたことがあるかについて尋ねた。その結果、「よくある」と回答した母親が5%（14名）、「たまにある」と回答した母親が15%（48名）、「少しある」と回答した母親が24%（75名）であり、約半数近く44%の母親が幼稚園教諭に対して何らかの相談しにくさを体験していることが理解された（図4）。

次に相談をしにくいと感じた母親は、実際に幼稚園教諭に相談をしていないのかを調べるため、上述の幼稚園教諭への相談頻度「よくする」「たまにする」と回答した群と、相談頻度「あまりしない」「全くしない」と回答した群の2群に分け、それらを相談しにくいと感じたことがあるかについて尋ねた質問の回答群との間でクロス集計を行った。その結果、相談しにくさと相談頻度との間に大きな違いはみられなかった（表2）。

次に、相談しにくさを感じたことのある44%（137名）の母親を対象に、その理由を尋ねた。その結果、「先生が忙しそうなので、話しかけにくい」が52%（71名）と最も多く、「先生に相談してよい内容なのかかわからない」34%（46名）、「子どもが園に通っているため不満や要求は言いにくい」23%（33名）、「先生が相談を聞いてくれる雰囲気ではない」17%（23名）、「自分自身が忙しく、相談する時間がとれない」15%（21名）、「自分より若い先生に相談しにくい」6%（9名）、「相談するような子育てに関する悩みがない」5%（7名）と続いた。「その他」の理由としては、「相談しても聞いてくれないと悲しいから」「相談しても解決しないので虚しいから」などが挙げられた（図5）。

図4 幼稚園教諭に相談しにくいと感じたことはありますか？

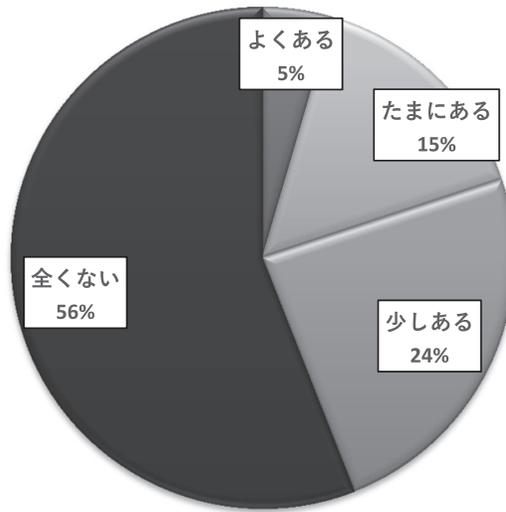
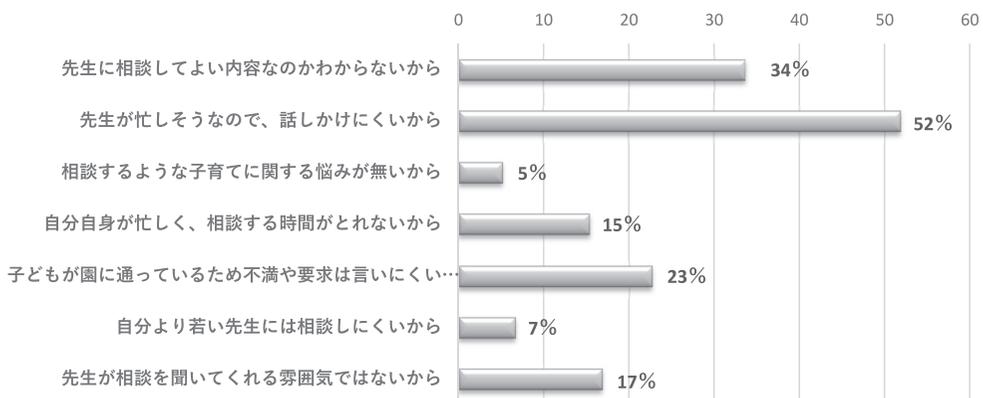


表2 相談頻度と相談しにくさのクロス集計

		相談頻度	
		相談する群	相談しない群
幼稚園教諭に相談をしにくいと感じたことがあるか	よくある	4.3% (8名)	4.7% (6名)
	たまにある	14.1% (26名)	17.3% (22名)
	少しある	24.5% (45名)	23.6% (30名)
	全くない	57.1% (105名)	54.3% (69名)
	合計	100% (184名)	100% (127名)

図5 幼稚園教諭に相談しにくい理由 (N=137)



(5) 幼稚園教諭に相談する際、どのような状況だと相談しやすいと感じるか（自由記述）

「幼稚園教諭（先生）に相談する際、どのような状況だと相談しやすいと感じるか」について自由記述で回答を求めた結果、98名の母親から回答が得られた。自由記述の回答は、質問の教示の影響もあり、内容に「相談しやすい」という記述が多くみられた。KH Coderが単語を検出する際の標準辞書では、「相談」と「しやすい」が分離してしまうが、本調査の趣旨から必要な文脈であると判断し、「相談しやすい」を強制抽出した。次に形態素解析を行い、分析対象となる文章を単語の単位に区切り、単語頻度分析で出現回数を分析した結果、152文が確認され、総抽出語数が2,691（うち1,020語を使用）、重なり語が513（うち362語を使用）であった。本研究では、母親が相談しやすいと感じる状況の特徴を簡明に示すため、出現頻度が4回以上の語のみを使用した。その結果、44語が分析対象となった（表3）。最後に対象とした44語を頻出語とし、語の共起関係を把握するため共起ネットワーク分析を行った結果、5つの要因からなるサブグラフが検出された。サブグラフ検出は、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出しグループ分けを行うものである（図6）。

【要因1：個別に相談できる環境】

まず1つめの相談しやすさの要因として、幼稚園教諭と個別に相談ができる環境が示された。具体例をみると「相談しようとするのを察して、個別に他の親のいない場所に誘導してもらえると話すタイミングを逃さず相談できると思う」「担任とゆっくり静かな場所で、個別に話せたらいいと思う」「軽い相談なら立ち話でもいいが、不満や要求は聞かれない人もいるので、個別に別室で聞いてほしい。別室でとも言いにくいのもっと察してほしい」といった記述がみられた。

【要因2：幼稚園教諭の余裕、雰囲気】

2つめの相談しやすさの要因としては、幼稚園教諭の時間的な余裕、ゆとりある雰囲気が示された。具体例としては、「先生が忙しくない環境、余裕のある雰囲気が感じられる状況だと話しやすい」「放課後、先生の余裕のある時間に直接ゆっくり話す時間があれば助かる」「先生が日々の雑務に追われ余裕が全くないように感じる。相談しやすい環境を作ることが必要だと思う。何か話したくても話しかけるのが悪いような雰囲気」といった記述がみられた。

【要因3：幼稚園教諭の子ども理解と伝達】

3つめの相談しやすさの要因としては、日頃から幼稚園教諭が子どもの様子を理解し、保護者に伝えてくれる姿勢が示された。具体例として「日ごろの子どもの様子、気になることを話しかけてくれると話しやすい。さようなら、だけで終わらない」「お迎えの時、子どもの様子をよく話してくれると相談もしやすい」「子どもの様子を気にして、理解してくれている先生であれば相談しやすい」といった記述がみられた。

【要因4：個人懇談、個人面談の機会】

4つめの相談しやすさの要因として、定期的な懇談や面談の機会が示された。具体例として「個人懇談を5分程度でもいいので月一くらいあれば相談しやすいと思う」「学期毎に個人面談を設けてくれたら相談しやすいと思う」「懇談会の時先生と個人面談なので話しやすい。学期ごとであればよりよい段階で気づけて早期発見につながると思う」といった記述がみられた。

【要因5：日頃の保護者に対する声かけ】

5つめの相談しやすさの要因として、日頃の幼稚園教諭から保護者に対する声かけや気軽にコミュニ

ケーションをとれる関係性が示された。具体例としては「お迎えに行ったときに普段から声をかけてくれたりすれば、その時とかに話しやすい」「立ち話できる雰囲気。送り迎えの時、気軽に声をかけてくれると話しやすい」「先生の方からどんな些細なことでも相談して下さいなど、普段から声かけしてくれると相談しやすい」などがみられた。

表3 共起ネットワークで用いられた抽出語と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
先生	30	日ごろ	6
相談しやすい	25	経験	5
子ども	21	言う	5
時間	19	今	5
環境	16	些細	5
聞く	15	作る	5
個別	13	子育て	5
様子	12	場所	5
話せる	12	声	5
親	11	送迎	5
個人面談	10	普段	5
余裕	10	忙しい	5
お迎え	8	面談	5
気	8	コミュニケーション	4
話	8	個人	4
園	7	懇親	4
会話	7	懇談	4
状況	7	自分	4
雰囲気	7	送り迎え	4
幼稚園	7	担任	4
学期	6	保育	4
声かけ	6	連絡	4

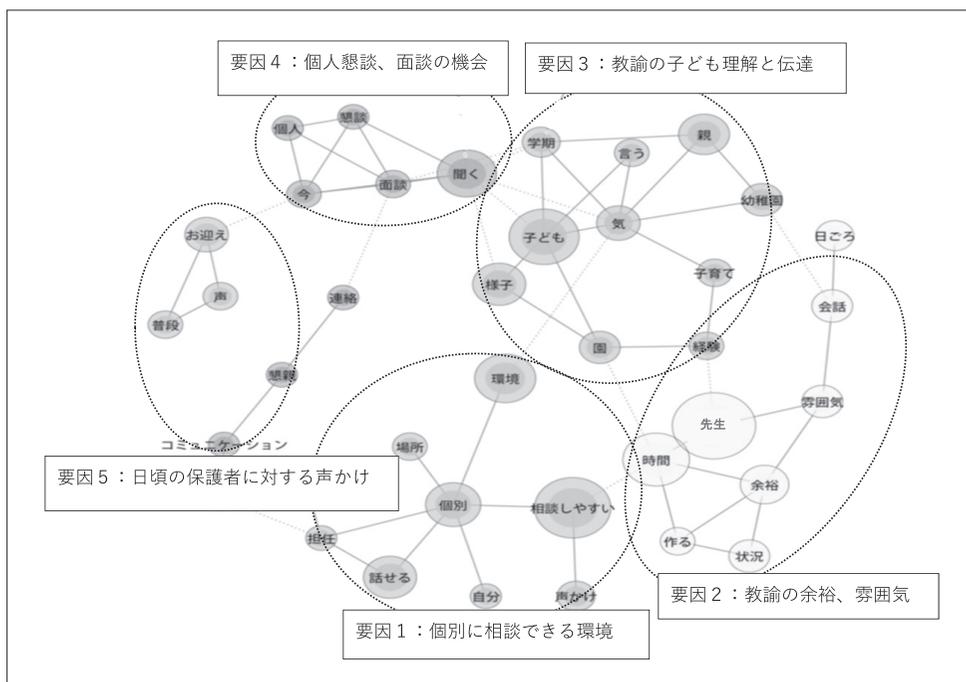


図6 共起ネットワーク分析の結果

4. 考察

(1) 幼稚園教諭への相談頻度と相談場面

まず、子育て相談を幼稚園教諭にどの程度するか尋ねた結果、約6割の母親が幼稚園教諭に相談していることが理解された。過去の調査においても、保育者に相談をしたことのある保護者は5割程度との報告があることから（荒牧、2004）、本研究の結果も保護者が保育者に相談する一般的な割合といえるのかもしれない。しかし一方で、笠原（2006）が保育所を利用している保護者を対象に調査した報告では、保護者に悩みがあるものの、4割～5割の保護者が実際の相談に結びついていないことを明らかにしている。このことを踏まえると、本研究における幼稚園教諭にあまり相談をしないと回答した保護者（約4割）の中にも、相談ニーズがあるものの実際の相談に結びついていないケースがある程度存在することが推測される。

次に、「よく相談する」「たまに相談する」と回答した母親（59%）を対象を絞り、相談する場面について尋ねた結果、「子どもの送迎時」が約8割、「懇談会、保育参観、行事」が約5割という結果であった。幼稚園における相談は、他の相談機関のように相談室などの個室でする相談より、登園時や降園時の日常的なやり取りの中や、行事に参加した保護者に話しかけるといった形をとることが多い（中山、2016）。本研究の結果も、保育現場における相談の特徴を表した結果といえる。

(2) 幼稚園教諭に相談したい内容

幼稚園教諭に相談するとしたら、どのような内容を相談したいかについて尋ねた結果、上位3つは「子どもの社会性に関する相談（友達との関係、感情コントロール、落ち着きのなさ）」が57%、次に「子どもの基本的な生活習慣に関する相談（食事、着脱、睡眠、排せつ）」34%、「家庭における子どものしつけや教育に関する相談」28%という結果であった。過去に保育所を対象にした調査でも、本研究と

同様に「睡眠・食事等の基本的生活習慣」「身体の発育・社会性の発達等」「しつけ・教育等の育児方法」の3つが相談内容として多いことが示されており（日本保育協会、2000）、保護者が保育者に求める相談ニーズの特徴ととらえることができるだろう。また本研究の結果から、幼稚園においては「子どもの社会性に関する相談」が特に高い相談ニーズであることが理解された。これは幼稚園が基本的に3歳以上の子どもを対象としているためと考えることができる。

一方で「子どものことば面についての相談（ことばの遅れ、語彙がふえないなど）」、「子育てに伴う負担やストレスについての相談」、「幼稚園の保育内容や教育内容への要望」の3つは、相談ニーズとしては1割程度という結果であった。「ことば」に関する相談については、子どものことばの育ちで悩んでいる母親の数自体が少ないためと思われるが、深刻な相談という意味では、割合の低さとは別の観点で配慮すべき結果といえる。「幼稚園の保育内容や教育内容の要望」については、本調査の対象の母親は、幼稚園が行っている保育・教育に対する不満が少ないととらえることができるが、一方で子どもが利用している園に要望を言いにくいといった思いが反映していることも割合の低さに関係している可能性もある。最後に「子育てに伴う負担やストレスの相談」については、これまでの研究でも、子どもに関する相談ではなく、母親自身に関する悩みを持つ保護者が、悩みを抱えながらも保育士に相談を求めない傾向にあることが明らかにされている（笠原、2006）。また、荒牧（2016）の調査からは、幼稚園教師からのアドバイスが直接親の子育て不安感を軽減する要因とはなりえないとの指摘もある。育児ストレス、育児不安など親自身が抱える内面的な負担感、家族や友人、子育て仲間と相談することが多いことは、これまでの調査でわかっているが（伊藤、1999、荒牧ら、2008）、幼稚園や保育所においてもこうした相談ニーズを実際の相談につなげていくことが重要な役割といえ、今後の課題といえるだろう。

(3) 幼稚園教諭に相談をしにくいと感じたことおよび相談しにくいと感じた理由

幼稚園教諭に対して子どもや子育てに関する相談をしにくいと感じたことがあるかについて尋ねた。その結果、「よくある」と回答した母親が5%、「たまにある」と回答した母親が15%、「少しある」と回答した母親が24%であり、約半数近くの44%の母親が幼稚園教諭に対してなんらかの相談しにくさを感じた体験を持つことが理解された。

ではこの「相談しにくさ」は、実際の相談行動にどの程度関連しているのだろうか。そこで幼稚園教諭への実際の相談頻度と相談しにくいと感じたことがあるかについて尋ねた質問の回答群との間でクロス集計を行った。その結果、実際の相談頻度と相談しにくさとの間に大きな違いはみられなかった。この結果から、幼稚園教諭に対して感じる「相談しやすさ」「相談しにくさ」は、実際の相談行動と関連がないことが理解された。しかし、今回の調査では「相談しにくい」と感じたことのある母親が半数近くいたという事実、また、「相談しにくさ」を感じる母親で、実際の相談に結びついていない人が一定数いる事実から、その理由について質的な側面も含めさらに詳細に検討する必要があるだろう。

次に、相談しにくさを感じたことのある44%の母親を対象に、相談しにくいと感じた理由を尋ねた。その結果、「先生が忙しそうなので、話しかけにくい」が52%と最も多かった。この結果は、これまでいくつかの研究で指摘されている。例えば、望月ら（2008）の調査では、保育者への要望として母親の40%強、父親の30%弱が、保護者と保育者が落ち着いて話せる時間を改善すべきと考えていることを明らかにしている。保育業務の多忙さは、幼稚園教諭個人で解決することは難しい問題ではあるが、こうした保護者の声を受け止めるためには、各幼稚園の運営、さらに行政も含めた幼児教育全体の中で考えていく必要がある課題といえる。

その他、相談しにくさの理由に挙げられたのは割合が高い順に「先生に相談してよい内容なのかわからない」34%、「子どもが園に通っているため不満や要求は言いにくい」23%、「先生が相談を聞いてく

れる雰囲気ではない」17%と続いた。「先生に相談してよい内容なのかわからない」については、今回の調査ではその具体的内容をまではわからないが、少なくとも母親が幼稚園教諭に相談してよい内容に迷いを持っていることは理解できる。上述で示したように、子どもに関する社会性、基本的な生活習慣などは比較的相談してよい内容と認識しているが、例えば親自身の悩み（育児不安、ストレス）については、幼稚園教諭に相談すべきでないと考えている可能性もある。幼稚園ではどのような内容の相談をしてよいのか、保護者に周知理解を図ることで相談への迷いを少しでも解消することが求められる。「子どもが園に通っているため不満や要望をいいにくい」については、先ほど結果で示した相談したい内容として「幼稚園の保育内容や教育内容の要望」が1割程度しかいなかったこととの関連があるかもしれない。幼稚園を利用する母親の抱きやすい思いであることを、現場で改めて理解する必要があるだろう。最後に、「先生が相談を聞いてくれる雰囲気ではない」と回答した割合としては17%ほどであったが存在した。この割合が低いととるか高いととるかは難しい問題であるが、幼稚園教諭の多忙さとも関連がありそうな内容である。また、このテーマは次の自由記述分析にも関連する内容であるため、そこで併せて検討することにする。

(4) 幼稚園教諭に相談する際、どのような状況だと相談しやすいと感じるか（自由記述）

幼稚園教諭に相談する際、どのような状況だと相談しやすいと感じるかについて自由記述による回答を求めた。自由記述で用いられた語の共起関係を把握するため共起ネットワーク分析を行った結果、次の5つの要因からなるサブグラフが検出された。ここでは、保護者が相談をしやすいと感じる5つの要因、それぞれについて解説および考察をする。

【要因1：個別に相談できる環境】

まず、母親が相談しやすいと思う状況としてとらえていたのは、送迎時など他の保護者や担任以外の幼稚園教諭がいる場ではなく、担任と個別に話せる場であることが理解された。これは保護者に相談したいとの思いがあっても、他の人の目が気になる状況や周囲に配慮しなくてはいけない状況においては、相談をすることそのものをためらう心境につながりやすいことを示唆している。保護者からの相談は、内容によってデリケートな側面を持っている。幼稚園教諭はこうした保護者の気持ちを察し対応することが求められる。幼稚園は相談室による相談より送迎時など日常的な場面での相談が多いのが特徴といえるが、中にはその状況では話しにくいと感じている保護者がいることを認識しておく必要があるだろう。

【要因2：幼稚園教諭の余裕、雰囲気】

母親が相談をしやすいと思う状況としてとらえていた2つ目は、幼稚園教諭自身の余裕やゆとりある雰囲気であることが理解された。これは先に触れた「先生が相談を聞いてくれる雰囲気ではない（17%）」、「先生が忙しそうなので、話しかけにくい（52%）」という結果に関連した要因といえるだろう。実際、自由記述に「何か話したくても話しかけるのが悪いような雰囲気」と記述されたように、幼稚園教諭の忙しそうなお姿、余裕のない表情をみることで話しかけてはいけない雰囲気を感じ取り、保護者が相談することをためらうという結果につながっていると推察される。笠原（2004）は、保護者が相談する時間と場所があることを認知すると、保育者に悩みを打ち明ける割合が高くなることを報告している。この報告を踏まえると【要因1：個別に相談できる環境】【要因2：幼稚園教諭の余裕、雰囲気】は、保護者が幼稚園教諭に相談する前提として大きな意味をもつ要因といえるのかもしれない。

【要因3：幼稚園教諭の子ども理解と伝達】

母親が相談しやすいと思う状況としてとらえていた3つ目は、幼稚園教諭の日常の保育で子どもたちを理解しようとする姿勢、また日頃から保護者に対して子どもの園での様子を丁寧に伝える姿勢が、相談しやすさの要因となっていることが理解された。つまり、幼稚園教諭の日頃の保育と子どもへの向き合い方、保護者への向き合い方が保護者の信頼感につながり、相談しやすさに結びつくと考えることができる。笠原（1999）は、保護者から相談相手として認知される要因として、保育者の人柄だけではなく、保育者の能力が優れているかも関連していることを示している。このことから、日々の保育力と発信力といった幼稚園教諭としての能力について、保護者からの信用を得られるかどうか、相談を促進する鍵となるのではないかと考えられる。

【要因4：個人懇談、個人面談の機会】

母親が相談しやすいと思う状況としてとらえていた4つ目は、定期的な個人懇談、個人面談の機会であった。自由記述には「学期毎に個人面談を設けてくれたら相談しやすいと思う」など、定期的に個別に話せる面談を求める意見があげられた。このことは、【要因1：個別に相談できる環境】で触れたように、送迎時など日常的に話せる場面だけではなく、保護者が幼稚園教諭と1対1で話せる環境や時間を確保することが、保護者の相談ニーズを実際の相談につなげる上で重要な要因となっていると推測される。個人懇談や面談を増やすことは、幼稚園の負担が増える面もあるが、個別に話せる状況を少しでも増やすことが、潜在的にある保護者の相談ニーズを引き出す要因となることは間違いのないだろう。

【要因5：日頃の保護者に対する声かけ】

母親が相談しやすいと思う状況としてとらえていた5つ目は、日頃の保育者からの声かけであった。特に自由記述の中では、幼稚園教諭のほうから気軽に声をかけてもらえると、相談しやすいとの声が多かった。鶴ら（2017）は、保育所を利用する保護者を対象とした調査の中で、保護者が保育士に悩みを相談する条件として、「日常的な保護者へのアプローチ」を挙げている。保育士が保護者に対して「こまめな声かけ」をすること、「小さな変化への気づき」を伝えること、「子どもの話題とした意図的な会話」といった日常的なアプローチが、保護者の信頼につながることを指摘している。これらを踏まえると、幼稚園教諭が保護者の思いをくみ取る形で、短時間でも日常的にコミュニケーションとる姿勢が、保護者からの信頼感を増し、相談したいという思いにつながるのではないかと考えられる。

5. まとめと課題

本研究は、幼稚園における保護者の相談ニーズの実態を明らかにすること、また保護者が幼稚園教諭に子育て相談をする際の阻害要因、促進要因を解明することを目的に実施した。

まず、幼稚園における保護者の子育て相談の利用状況としては、約6割の母親が幼稚園教諭へ子育て相談をしていた。相談内容としては「子どもの社会性に関する相談」のニーズが最も多く、保護者の悩みや関心の高いテーマであることがわかった。このことは、今後の保護者への相談だけではなく、懇談や話題提供の参考となるだろう。一方で「子育てに伴う負担やストレスの相談」は1割程度しか要望がなかった。しかし、幼稚園はそうした保護者の精神的な負担を支える役割としても期待されている。幼稚園が親自身のメンタル面を支える役割としてどう保護者に認知してもらうかは今後の課題といえるだろう。

次に、子育て相談の阻害要因についてみると、44%の母親が幼稚園教諭に対してなんらかの相談しにくさを感じた体験があることがわかった。その理由として最も高い割合だったのが、「幼稚園教諭の多

忙さ」であった。この業務の多忙さは、幼稚園教諭個人で解決できない側面もあるが、保護者の相談したい思いを阻害している一番の要因となっていることは、幼稚園現場として認識しておく必要があるだろう。一方で保護者が相談しやすいと感じる要因としては、次の5つの要因が明らかになった。【要因1：個別に相談できる環境】【要因2：幼稚園教諭の余裕、雰囲気】【要因3：幼稚園教諭の子ども理解と伝達】【要因4：個人懇談、個人面談の機会】【要因5：日頃の保護者に対する声かけ】。これらは、上述の“幼稚園教諭の多忙さ”とも関連する要因もあるが、園としても、教諭個人としても取り組める内容が含まれており、日常の幼児教育場面での実践が望まれる。幼稚園教育要領で示された「幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め、地域における幼児期の教育センターとしての役割を果たす」ためにも、こうした保護者のニーズを受け止め、幼稚園運営、保育実践、支援実践に反映する取り組みが期待される。

最後に本研究の課題について、2点挙げておく。まず1点目は、研究における対象範囲の狭さである。今回の調査は福岡県A地区の幼稚園を利用する保護者を対象に実施された。そのため限られた地域の特色としての知見は得られたが、これを一般化できるかは難しさがあるだろう。今後、いくつかの地域で同様の調査を実施し、検証する必要があるといえる。課題の2点目は、質問内容の精緻化の必要性である。例えば、幼稚園教諭に相談をしにくい理由として「先生に相談してよい内容なのかわからない」に34%の保護者が回答した。保育現場への還元を考えたときには、その内容の吟味こそが重要な知見といえるが、本調査では明らかにすることができなかった。こうしたことを踏まえ、今後はさらに質問内容を精緻化すること、また質的分析による内容の検証が必要といえるだろう。

引用文献

- ・荒牧美佐子、安藤智子、岩藤裕美、丹羽さかの、立石陽子、砂上史子、堀越紀香、無藤隆「幼稚園における子育て支援の利用状況－育児不安との関連から－」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 2、27-37、2004
- ・荒牧美佐子、安藤智子、岩藤裕美、丹羽さかの、立石陽子、砂上史子、堀越紀香、無藤隆「幼稚園における子育て支援の利用状況（第2報）」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 3、9-16、2006
- ・荒牧美佐子、無藤隆「子育てへの負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に」発達心理学研究、19（2）、87-97、2008
- ・樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版、2014
- ・伊藤裕子、池田政子、川浦康至「既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響」心理学研究、70、17-23、1999
- ・厚生労働省『平成27年版厚生労働白書』日経印刷、105-107、2015
- ・笠原正洋「育児相談において保護者がとらえる保育者の対応について」中村学園研究紀要 31、21-27、1999
- ・笠原正洋「保育園児の保護者が子育ての悩みを保育士に相談することに何がかわっているのか」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 36、25-31、2004
- ・笠原正洋「園の保護者による保育者への援助要請行動：満足度および援助要請意図の関連」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 38、19-26、2006
- ・望月彰、諏訪きぬ、山本理絵「子育ての中の父親・母親が保育園に望んでいること」発達 114、26-33、2008
- ・望月彰、工藤英美、山本理絵「保育園・幼稚園における子育て相談と親のニーズとのズレ：全国調査（保育・子育て3万人調査）の経年比較より」人間発達学研究（4）、47-64、2013
- ・中山智哉、渡邊望、春高裕美、木山徹哉「母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的研究－母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連－」九州女子大学紀要、50（2）、15-29、2014
- ・中山智哉「保育・教育相談の内容と実際（第11章）」、太田光洋編『子育て支援の理論と実践』保育出版会、167-172、2016
- ・日本保育協会「保育所における子育て相談に関する調査研究報告書」http://www.nippo.or.jp/cyosa/03/03_ta.html
- ・鶴宏史、中谷奈津子、関川芳孝「保育所を利用する保護者が保育士に悩みを相談する条件：保護者へのインタビューを通して」教育学研究論集（12）、31-38、2017